

風景と思考

「風景と思考」、これは今から四半世紀近く前に佐野陽一が行った展覧会のタイトルである。あまりに直接的ではあるが、つねに真摯に風景と向き合う彼らしさが十分にあらわされている。風景を見（視、観、診）、空気を感知、思考する。そこからさまざまな世界が浮かび上がる。そしてそれらが繰り返されていくのだ。とはいえ、当然のことのように見（視、観、診）方も感じ方も変わっていく。しかし彼のなかで変わらないものがあり続ける。それは光に対する見（視、観、診）方、感じ方である。この光という抽象的なものは物質によって初めて明らかにされ、具体的になる。彼にとっての物質は水であり、樹々である。そしてそれらを使い時間を可視化する。時間もまた抽象的であるのは言うまでもない。光と時間の可視化。私が彼の作品をある種の概念芸術だと考えるのはそれ故である。もちろんこれは個人的な誤読によって成り立っているのかもしれないが、そのような読みも含めて、それらの作品には作家のさまざまな内的世界が、思考が、多くの言説が渦巻いているのだ。

今回の展覧会のタイトルが「錐の𦉳」というのも暗示的である。というのも「こだま」という文字は幾つかあるのに、わざわざ「𦉳」を使っているのだ。「錐」と「𦉳（こだま）」のつくりの「牙（きば）」は形状的に似ており、そこでこの漢字を選んだのだろうか、あるいはそのような意図もなくただ選んだのだろうか。これもこちらの勝手な推測でしかないが、このように考えていくと「目眩（めまい）」をおこしてくる。しかしその目眩によって新たな想像力が紡ぎだされていくのだ。いずれにせよ空間が時間化され、時間が空間化される世界の楽しみが佐野の作品にはあるのだ。

岡村多佳夫（おかむら・たかお）／美術評論家